

山を降りたイエス

[マタイによる福音書 8章 1～17節]

「イエスが山を下りられると、大勢の群衆が従った。すると、一人の重い皮膚病を患っている人がイエスに近寄り、ひれ伏して、「主よ、御心ならば、わたしを清くすることがおできになります」と言った。イエスが手を差し伸べてその人に触れ、「よろしい。清くなれ」と言われると、たちまち、重い皮膚病は清くなった。イエスはその人に言われた。「だれにも話さないように気をつけなさい。ただ、行って祭司に体を見せ、モーセが定めた供え物を献げて、人々に証明しなさい。」さて、イエスがカファルナウムに入られると、一人の百人隊長が近づいて来て懇願し、「主よ、わたしの僕が中風で家に寝込んで、ひどく苦しんでいます」と言った。そこでイエスは、「わたしが行って、いやしてあげよう」と言われた。すると、百人隊長は答えた。「主よ、わたしはあなたを自分の屋根の下にお迎えできるような者ではありません。ただ、ひと言おっしゃってください。そうすれば、わたしの僕はいやされます。わたしも権威の下にある者ですが、わたしの下には兵隊がおり、一人に『行け』と言えば行きますし、他の一人に『来い』と言えば来ます。また、部下に『これをしろ』と言えば、そのとおりにします。」イエスはこれを聞いて感心し、従っていた人々に言われた。「はっきりしておく。イスラエルの中でさえ、わたしはこれほどの信仰を見たことがない。言うておくが、いつか、東や西から大勢の人が来て、天の国でアブラハム、イサク、ヤコブと共に宴会の席に着く。だが、御国の子らは、外の暗闇に追い出される。そこで泣きわめいて歯ぎしりするだろう。」そして、百人隊長に言われた。「帰りなさい。あなたが信じたとおりにするように。」ちょうどそのとき、僕の病気はいやされた。イエスはペトロの家に行き、そのしゅうとめが熱を出して寝込んでいるのを御覧になった。イエスはその手に触れられると、熱は去り、しゅうとめは起き上がってイエスをもてなした。夕方になると、人々は悪霊に取りつかれた者を大勢連れて来た。イエスは言葉で悪霊を追い出し、病人を皆いやされた。それは、預言者イザヤを通して言われていたことが実現するためであった。「彼はわたしたちの患いを負い、わたしたちの病を担った。」

[1] 「コロナに打ち勝つ」?

東京オリンピック・パラリンピックが今年の夏開催されるのかどうか。それに対して菅総理などは「オリンピックは、人類がコロナに打ち勝った証として行う」という様なことを語っています。まあ、今のこの事態を前向きに捉え、スポーツを通して世界の人々に希望を与える機会にしたいということなのだと思います。

けれども私などが引っかかるのは、「コロナに打ち勝つ」ということです。まるで怪獣か悪魔に打ち勝つみたいにです。私は、コロナ・ウィルスは、善でも悪でもないと思います。そこには悪意のような人格はありません。「勝ち負け」の世界は人を裁くことに繋がらないでしょうか。感染して陽性者になったからと言って、地域社会に酷い迷惑をかけてしまったなどと思う必要は全くないと思いますし、私はコロナ対策特別措置法等でいわゆる「罰則規定」を設けるとするのは社会の空気を暗くしてしまう気がしてしょうがありません。それは丁度、聖書が語る「律法」(それは元々生ける神様の言葉です!)が独り歩きして、人を裁く材料になってしまったこと(=律法主義)と同じになってしまうような気が致します。

[2] 主イエスが山から降りて来られた!

そういうことを思いながら、今日はマタイによる福音書の8章1節以下をご一緒に見てみたいと思います。5章から7章までは、イエス様は山の上で弟子たちや群衆たちに説教をなさったその言葉が纏められていました。「山上の説教」ですね。今日の箇所はまず「**イエスが山を下りられると**」とあります。マタイによる福音書では「山」とは象徴的な意味合いがあるといわれます。旧約で有名な山は**シナイ山(ホレブ山)**がありますね。**モーセ**が神様とまみえた場所です。そこで**十戒**を授かった。或いは**預言者エリヤ**が神様の細き御声を聴いたのは**カルメル山**ですね。山とは**神様が臨在される場所**であり、平地とは区別されるのです。ですからイエス様が「山の上」で語られたというのは、そこに神的なものを重ねているのですね。新しい時代のモーセというイメージもあったと思います。

ところが、イエス様はずっとそこに居続けたわけではありません。**山から降りて来られて、人々の間、つまり私たちの世界に来られてみ業を行われました。**この後ずっとです。一度イエス様の山上の変貌の出来事(17章)がありますが(あの場面でモーセとエリヤが出てきますね)、もう一度山に行かれるのは、復活の後(28章)です。とても象徴的です。

さてイエス様が山から降りて来られると、マタイ福音書はこの8章で立て続けに、**主イエスの御手と、また言葉による奇跡の業・癒しの業**を記しています。

[3] 主イエスは誰をも排除しない

4つの奇跡がここにはあります。一つは**重い皮膚病の者の癒し**。現在はその言葉を使いませんが、以前の訳では「らい病」となっていたその病の者を、直接触れることによって癒されました。二つ目は**異邦人であるローマの百人隊長**と出会い、その僕が中風であったのですが、百人隊長の主への全幅の信頼の言葉を聞き、イエス様は感心されて「**あなたが信じたとおりになるように**」と、言葉でその僕を癒されました。三つめは、**ペトロの義理の母親(しゅうとめ)**の癒しです。ずっと熱を

出して寝込んでいたようです。当時で言えば随分高齢の仲間入りだったのかも知れませんが、身内の者がずっと苦しんでいても見ているだけというのは家族は本当に辛いですね。その中にイエス様は入って来られて、「その手に触れられると熱は去り、しゅうとめは起き上がってイエスをもてなした」という奇跡です。ペトロも本当に嬉しかったと思います。そして四つ目は、多人数の癒しです。悪霊に取り付かれたと思われていた人々がイエス様の前に連れてこられました。16 節にこう書いてあります。「夕方になると、人々は悪霊に取りつかれた者を大勢連れて来た。イエスは言葉で悪霊を追い出し、病人を皆いやされた」。

一番目と三番目の奇跡は、イエス様は「手」で触れ、癒して下さいました。二つ目と四つ目は、イエス様はその「言葉」で癒しをなさったのです。イエス様は、言葉だけでもみ業をなすことがお出来になるということで、これは大事な聖書の信仰だと思います。神様の言葉というのは人間の言葉と違って、出来事を引き起こすのです。聖書は創世記の初めから、「神は言われた」と書いています。「神は言われた。光あれ。するとそのようになった」とあるように、全ての創造の業を神は言葉をお用いになってなされ、それを完成されたのです。神様の言葉というのは、神様のご意志そのものです。空しくならない神様の力そのものと言って良いと思います。それが最も顕著に現れているのが、百人隊長の僕の癒しのお話ですね。「ただひと言おっしゃってください」と言えたこの人も凄いと思います。創世記を知っていたのでしょうか。百人隊長はいわゆる「契約の民」とは言えない異邦人なのです。けれども百人隊長の信仰に呼応してイエス様は「お帰りなさい。あなたが信じたとおりになるように」とおっしゃったのです。13 節の最後の言葉はこうです。「ちょうどその時、僕の病気はいやされた」。主の言葉の驚くべき創造性です。

今、百人隊長は契約の民とは言えない異邦人だったと申しました。イエス様の愛は、民族主義を超えているのです。誰をも排除しません。異邦人だけではありません。当時、律法の民族主義的、排他的な解釈によって、神殿で神様を礼拝することが許されない人々がおりました。重い皮膚病の人、体の不自由な人、精神に疾患を持つ人たちです。こういう言い方はとても酷い言い方になりますが、共同体の中にいる者にとって、彼らは格好の材料だったのでしょうか。神の共同体から弾き出された者たちを横目で見ながら、自分たちは安全地帯にいる、という密やかな安心感を得ていたと思います。律法主義というのはとても残酷なのです。「神」という権威によって、弱い者たちが裁かれる。「この人たちは神から捨てられている。崇られている」と、そんなことをずっと言われていたら、もう「自分」という存在を保つということは出来ないと思います。「いじめ」に似ていると思います。

[4] キリストと結ばれる時、「新創造」が。

今日の箇所、本当ならじっくりと一つ一つのこの奇蹟の業を見てゆきたい箇所ですが、でもこうやって通して読んでみると、ああ、イエス様が私たちのこの世界の中に来て下さったと言うことはこういうことなのだなあ、と思わされないでしょうか。マタイ福音書は必要最小限ですが、丁寧に描いていると思います。イエス様の手が私たちに向かって伸びているということ。(8章3節、8章15節)。そして、イエス様ご自身の腹の底から響いてくるような声も聞こえてきます。「よろしい。清くなれ」。また、「かえりなさい。あなたが信じたとおりになるように」。また、悪霊をも「言葉で追い出した」とあります。そのように、イエス様は、一人ひとり、私たち一人ひとりに真向かって下さるのです。そして、私たちが抱える生きる痛み、悲しみを誰よりもよくご存じで、そして、優しく触れて下さるのです。

重い皮膚病に触れるとは、当時は自ら感染することと同義語だったことでしょう。そんなことはお構いなしなのです。この救い主は。きっと今の新型コロナで苦しみ、孤独に悩む方々にもこの方は触れて下さっているのです。今、親族の者も同じ病室に入れなくとも、このお方、山から降りてこられたこのお方は、触れて下さるのです。「わたしがあなたの病を担うよ。わたしにあなたを預けなさい」と。マタイはここでイザヤ書 53 章の言葉の成就をみて記さずにはおれなかったのですね。—「彼はわたしたちの患いを負い、わたしたちの病を担った」(マタイ 8:17、イザヤ 53:4)。—患い・病を担われたということは、それまで病の故に神様から裁かれていたと思われていた存在が、神様との交わりが回復したということの意味します。いや、本来人間とは創世記が言っているように、私たち被造物は神様の祝福の中に創造された「はなはだ良い者」なのだという原点回帰をして下さったということだと思います。しかし、そのために主は山を降り、私たちの中にどうしようもなく巢食っている罪とその裁きをも引き受けて下さったのです。それも深い意味で、「彼はわたしたちの患いを負い、わたしたちの病を担った」ということです。ですからこの主イエスと繋がるということで、私たちは本当に、重荷とか、或いは呪いとか祟りとか、都合よく言われていたようなものから自由にされるんです。

パウロは言いました。「だからキリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた」(コリント二 5:17)。

主は私たちに、私たちの罪故の「罰則」を与える方ではありません。むしろ、私たちの罪と弱さを担って下さったお方です。このお方が言われるのです。この声も今日も聞こえるでしょうか?—「お帰りなさい。あなたの信仰の通りになるように」。或いは「よろしい。清くなりなさい」、「そう言われるとたちまち清くなった」。この生ける神様がどんな時も、死に至る迄私たちと共に生きていて下さいます。心から主に依り頼んで生きて行きたいと思えます。お祈りを致します。